

収録された諸論文はいずれも充実しており、多くのことを学ばせていただいた。ここでは、個々の論文に対する具体的な質問というよりは、本書の大きなコンセプトに関する点を中心として、コメントさせていただきたい。

第Iに、長岡氏の総論によれば、本書は「資本主義社会の抱える課題を克服」(16頁)すること、「資本主義のオルタナティブを打ち立てる」(17頁)こと、という観点からイスラーム経済を扱っている。また、第10章では「イスラーム経済のポスト資本主義的可能性の探究」が本書のミッションであるとする(270頁)。しかし、「資本主義」とはかなり多義的な言葉であるので、本コメントでは、本書のなかでこの語の意味がどのように捉えられているのか、また「資本主義のオルタナティブ」といった問題意識が、本書のなかでどのような形で共有されているのかを考えてみたい。それは「イスラームの都市性」プロジェクト以来のオリエンタリズム批判、西洋中心主義批判の流れが現在どのような状況にあるのかを考える助けともなるだろう。ただ私は中国史が専門であり、専ら中国史研究からの視点となるので、偏りや不十分な点があるのをお許しいただきたい。

なお、第I部分では各章について質問をさせていただいているが、第1章亀谷論文(貨幣)、第5章五十嵐論文(ワクフ)については、加藤さん(貨幣)、三浦さん(ワクフ)の両巨頭におまかせしたいということで、触れていません。

第IIに、本プロジェクト「イスラーム信頼学」全体の主旨とかかわる、コネクティビティ、フレキシビリティ、モビリティ、ユニバーサリティ等のキーワードが、本書においてどのように「比較」の視座に生かされているのか、という点について考えてみたい。本書では、コネクティビティ等の性質をイスラーム特有のものと見ているわけではなく、各経済制度にある程度共通したものとしつつ、「各経済制度のコネクティビティやフレキシビリティのパターンを分類して共通性や独自性を解明する素材を見出す」(15頁)ことを課題として設定している。本書の各論文の多くは「モビリティ」「コネクティビティ」等の語に言及しているが、ほとんどがそれぞれの扱う具体的なテーマに即して軽く触れられているに止まり、「パターンを分類して共通性や独自性を解明する」という作業が本書を通じてどのように行われているのかが、読者にはわかりにくい。上記の引用部分からすると、「素材を見出す」ことが目的で、「パターンを分類して共通性や独自性を解明する」ことは今後の課題ということかとも思われるが、将来的な見通しとしてもどのような諸パターンを想定しておられるのか、伺いたいところである。

I 「資本主義」とは

「資本主義」の多様なイメージ

1 資本主義社会のプラスイメージ

- 1a 自由な経済活動、職業選択の自由、売買の自由など、束縛のなさ。「放任された自由」。
- 1b 個人の自立、市民社会的共同性、自律的エトス、モラルなど、ボトムアップの民主的秩序。(←→パーリア資本主義)
- 1c 明確な法的ルール、契約遵守、形式合理性、権利保護など。制度的に「保障された自由」。
- 1d 自由競争を通じての能動性の発揮、イノベーション、その結果としての経済成長。

2 資本主義社会のマイナスイメージ

- 2a 物質的欲望を動因とする利己主義的な競争社会、共同性・親和性の欠如。根無し草的不安。
- 2b 資本家による労働者の搾取。階級支配。非人間的な労働。自己疎外。
- 2c 恐慌やバブル崩壊などに見られる経済秩序の不安定性。実体経済と乖離した金融資本主義やグローバル化による不安定性の増幅。
- 2d 貧富の差の拡大。自己責任としての貧困。

* 「資本主義」という語でどのようなものを表そうとしているのか、明示しておく必要があるだろう。

本書の各論文で、「資本主義」はどのようなものと捉えられているか。

cf. 長岡慎介『イスラームからお金を考える』筑摩書房、2024、128-130 頁

「資本主義の一番の特徴は、ひたすらお金もうけを追求することです。もう少し難しい言い方をすれば、持続的な経済成長を追い求めることが資本主義の根幹にある考え方です。……近代のヨーロッパで生まれた資本主義の特徴は何なのでしょう。それは、あらゆる商品やサービスが市場を通じて売買されるようになった点です。」

⇒この文に続き、長岡氏は、資本主義の進行方向として、安い労働力の使用による利益追求→技術的イノベーション→金融資本主義、という流れを描き、主に金融資本主義段階の状況を批判しているように読めるが、そもそも資本主義自体がこのような指向を持っていると考えれば、資本主義全般の批判と捉えることもできる。

総論（長岡慎介氏）：

16 頁 「21 世紀に入り、資本主義はそれまでその外部にとどまっていたあらゆるアクターを巧みに吸収し、さらなる膨張と拡大を続けている。それは……ポランニーのいう市場交換が及ばない互酬や再分配といった非市場セクターに資本主義が浸透しているだけでな

く、自然や信頼（評判）といった本来、経済外的存在とされるアクターも、金融化の名の下に資本主義の内部に組み込まれていっている。こうした資本主義の膨張と拡大は、富める者とそうでない者の格差をさらに拡大させており、それが国家間の紛争や社会の分断をより深刻化させることにつながっている。」

⇒ここで弊害が指摘されているのは、資本主義全般なのか、それとも21世紀に入ってから金融資本主義とか新自由主義といった潮流なのか。弊害はどの面、或いはいつから生じたと考えられるのか。

⇒12頁、「イスラームの都市性」のもとで組織されたイスラーム経済論研究会について、「合理的経済人を西洋経済思想及びイスラーム経済思想に共通する前提とした上で…」とされているが、この前提は本書でも維持されているのか。議論の原点となる人間像。第7章のようなゲーム理論の適用可能性という点でも興味深い問題。

第2章（平野〈野元〉美佐氏）

68頁「頼母子講がいわゆる現代の資本主義と大きく異なるのは、自分だけの利益を求め資本の拡大を目指すのではなく、仲間の資本の拡大をも一緒に目指すところにある。……頼母子講のモビリティは、相互扶助の倫理と資本主義の精神を重ねる仕組み」

⇒「いわゆる現代の資本主義」「資本主義の精神」とは？資本主義経済においてもある程度ウィンウィンでないと取引は続いていかないとと思うが、それと異なる点はどこにあるのか。

第3章（長岡氏）

87頁「格差や貧困といった資本主義がもたらすさまざまな弊害を克服するためにイスラーム金融にできること」

91頁「イスラーム金融は、本当に実現可能なポスト資本主義社会の構想が、ラディカルな変革を声高に叫ぶ思想や実践からではなく、資本主義と付かず離れずの関係にあるところから生まれてくるのだということをあらためて私たちに想起させてくれているのである。」

⇒ここで念頭に置かれている「資本主義」とは、実体経済と遊離した金融資本主義を指しているように思われるが、実体経済を支える産業資本主義もあるとすると、ここでいう「ポスト資本主義」とはどのようなものか。産業資本主義もあわせてのりこえるものなのか。

⇒従来資本主義体制下では、格差や貧困などの弊害の是正という課題に対し、主に社会政策という形で国家の関与により対処を試みてきた（むろん民間での福祉活動もあるが）と思うが、本章では、国家の役割についてはほとんど期待していないように見える。その点を本章或いは本書全体の特色と考えてよいか。

第4章（荒井悠太氏）

120頁「彼（ブローデル）は『資本主義』の語に対しては独自の定義を与え、それを市場経済の高度に発展した一部の都市に発する交換の最上部の構造と捉えた。」

123頁「経済の上部構造を占める資本主義がいかにも高度な発展を遂げたとしても、経済生活の基層には日々の糧を得るための実体経済が常に存在し続けている。そのメカニズムを巧みに描き出している点こそが、イブン・ハルドゥーンの経済モデルに普遍的な有効性をもたらしているのではないだろうか。」

⇒ブローデルの「資本主義」定義はここで「独自の」と言っているように、資本—賃労働関係を基準とする一般的な定義（マルクス等）とは異なるが、ウォーラステインなどにも受け継がれている、一定の流通力をもつ定義であろう。本書で「資本主義」という語が用いられる場合、大資本による広域的な利益追求といった点に重心を置いたブローデル的な意味をもつ使い方が多いように思われるが、本書の諸章に共通する「資本主義」定義は存在するのだろうか。

⇒本章では、イブン・ハルドゥーンの議論では一つの王朝をそのまま経済生活の基本的単位とする形で経済がモデル化されており、そこがブローデルと異なる点だとしている。ただ、第10章（長岡）274頁に「神と個々人の契約関係の束によって成立するウンマ……地理的制約をもともしない属人的世界宗教たるイスラームの本質」とあるように、本書では境界を持たない広域性といったものが、イスラームの特徴として強調されているように思われる。イブン・ハルドゥーンの一国単位の実体経済論は、こうした特質とどのように関わるとだろうか。

第6章（岩崎葉子氏）

本章で扱われている「低組織化」システムは、伝統中国の産業とも共通点があり、興味深い。現代中国でも一部の産業では「低組織化」ゆえのコスト減で競争力を高めているものもあるようだ（イランのアパレル産業とはかなり状況が違うとは思いますが、例えば汎用性のあるモジュール製造に零細な起業家が殺到し、企業の持続・拡大より短期の利益の最大化をめざす。太陽電池や（パクリ）携帯電話などの製造業。丸川知雄『チャイニーズ・ドリーム——大衆資本主義が世界を変える』ちくま新書、2013）。

167頁「産業そのものの発展や高度化にはマイナス要素である『低組織化』も、個々の事業者の立場からはサック・コストが抑えられ、短期的にも長期的にも安定的ではありえないビジネス環境……にあって一定程度の合理性を備えている。」

⇒本書全体としては、「資本主義社会の抱える課題を克服」「資本主義のオルタナティブ」の追求が課題となっているが、本章では、「イランの実状に根ざした一定の合理性」という説明であって、資本主義の欠陥を克服という姿勢ではない。この点、編者や他の章の執筆者とのすり合わせは如何？また、本章では特にイスラーム的な性格には言及せず、他の地域でも同様の状況であれば同様の対応が行われるという考え方だと推測されるが、それ

でよいか。ただ末尾 169 頁に「イランの市場の個性は『過渡的』なのではなく、むしろイラン社会の本質に根ざした『常態』なのではないか」とあるが、「イラン社会の本質」とは何か。それは変化しないものなのか。

第7章（町北朋洋氏）

本章では、A・グライフの議論をかなりの紙幅をさいて扱い、有名なマグリブ商人とジェノヴァ商人の比較に関しては、トリヴェッラートによる批判も取り上げられているが、比較的淡々とした紹介に止まる。本書（長岡編著）の議論からいうと、現在の学界で広範な影響力をもつ（と思われる）グライフのマグリブ商人・ジェノヴァ商人比較論（『比較歴史制度分析』特に第9章）及びトリヴェッラートによる批判につき、イスラーム経済の専門家からの踏み込んだご意見を伺いたいところである（町北さんお一人への質問というよりは、執筆者の皆さんへの質問）。

⇒グライフの議論で問題になる点は、①集団主義的なイスラーム文化に根ざすマグリブ商人の行動と、個人主義的なヨーロッパ（ラテン）文化に根ざすジェノヴァ商人の行動とを二項対立的なモデルとして扱っている点、そして②マグリブの制度は現代の発展途上国の制度と類似しているのに対し、ジェノヴァ商人が形成した匿名的な相手との取引を支える公的な契約執行メカニズムは経済発展を促した、とする対比の仕方であろう。一方、トリヴェッラートはセファルディム系ユダヤ人商人の事例研究からグライフのマグリブ商人論を批判するが、どの程度この例が一般化できるのか、という疑問も生ずるだろう。

⇒なお本章では、バングラデシュの縫製業を例として、スポット取引よりも関係的取引のほうが利益率が上昇したという例を紹介するが（189頁）、この点、第6章岩崎論文との対話を期待したいところである。

第8章（小茄子川歩氏）

219頁「『商品』との接続により『市場』のバッファという特質が顕在化したタイミングで、共同体の秩序を保持・温存するために、自己意識をもつ政治的アクターである人間が『市場』からバッファの特質を切り離し、それを『商品』世界と伝統地域社会の『あいだ』にバッファとしての『市場』として具現化させたのである。」

221頁「質的等価原理のなかに常に潜在している利得への動機あるいは量的等価原理への転倒の原理を斥け、平等化・平等原理としての質的等価原理の支配する共同体の秩序や社会経済システムを保持するために、社会に組み込まれていた社会的知…。」222頁「考古学は、資本主義以前のなんらかの社会のあり方（そのほとんどが国家に抗する社会！）をみるとき、それがよりよい社会の創造に寄与し得る潜在性においてみようとする態度、そしてそれがもつ人類史的意義を現代社会のただしい理解にむけてわかりやすく提示しようとする態度を放棄してはならない。……そのような思考をもった考古学は……資本主義のオルタナティブを構想するための一助ともなる。」

⇒ここで「資本主義のオルタナティブ」といわれているのは、本章に即して言えば、市場の影響力から自らを守ろうとする「共同体」の秩序を指しているように思われるが、それでよいか。本書では、全体としてイスラーム経済が市場経済に親近的であることを強調しているようで、「共同体」を「資本主義のオルタナティブ」とする方向ではないのではないかと思われるが、議論を拝聴したいところ。

第9章（安田慎氏）

245頁「(統一的なガイドラインや特定の認証機関によるヒエラルキー的な産業構造に依存せず)むしろ、市場関係者たちが二者間の合意形成を図り、さまざまなコストを費やしていく過程でシャリーア適合性をめぐる共通見解を導きだしていくネットワーク型のガバナンス」

246頁「このモラル・コミュニケーションに基づく市場のコネクティビティこそが、イスラミック・ツーリズム市場のガバナンス、すなわち強靱性と柔軟性を高め、新たな公共性を涵養していく…。本章で論じてきたエコノミック・ツーリズムが描き出す独自の市場の姿は、現代の資本主義社会や新自由主義的な社会環境にある側面では立脚しながらも、異なった市場の在り方や可能性を示してくれている。」

⇒現代の資本主義社会や新自由主義の下では、大企業などが上から押し付けるプランを受け入れるだけで、二者関係的合意に基づくモラル・コミュニケーションに支えられた共同性が欠如している、という理解でよいか。

⇒売り手・買い手間の個別の相対交渉を通じて取引が行われる（標準化された品質・価格の製品の販売と対比して）という点からみて、本章で扱う事例はいわゆる「バザール経済」（同概念に対する私の理解は、原洋之介『クリフォード・ギアツの経済学』による）のもつ協同的側面と通底するところがあるように思われる。むしろ、バザールでの騒々しい交渉とは異なり、よりスマートな印象だが。

第10章（長岡氏）

274頁「(現代ワクフについて) 地理的制約の超克……。こうしたシステムの移送は、神と個々人の契約関係の束によって成立するウンマ…そのものであり、地理的制約をもともしない属人的世界宗教たるイスラームの本質が、そこにきわめてクリアーに映し出されている…。」

275頁「(スミスの「神の見えざる手」) 利己心の肯定の上に道徳性が実現する経済の構造を敢えてここでモラル・エコノミーと呼んでよいのであれば、ワクフの再生によって登場した現代のイスラーム経済システムでも、ある種のモラル・エコノミーが実現していると言ってもよいのではないだろうか。」

⇒本章は、利己的人間の利益追求の場としての「市場」と、そこで秩序と共同性を成り立たせる「モラル」との関係という根本問題に言及している。ヨーロッパでは、17-18世

紀に切実なものとなって以来、今日につながる問題。中国のように早期から市場経済と弱肉強食の競争が発展した地域では、戦国時代以来、「秩序コンプレックス」（秩序の存立にたいする不安感・焦燥感）が存在。「見えざる手」的な市場秩序形成論は、穏健ではあるが楽観的に過ぎないか。

⇒「モラル・エコノミー」概念について。E. P. Thompson の「モラル・エコノミー」概念は、市場一般に敵対的というわけではないが、大規模な商業流通に対抗する地域防衛的な方向性を持つ。J. C. Scott の場合は、より端的に、村落における「互酬性の規範と生存の権利」。スミスの「見えざる手」については一般に「モラル・エコノミー」という語は使わないと思う（Thompson 的文脈ではスミスはむしろ、モラル・エコノミーと対比されるポリティカル・エコノミーの側だろう）が、このような市場的秩序が、広域的な商業流通ではなく、「局地的市場圏」内の交換から生まれてきたという大塚久雄の見解がかつて有力だった。いずれにしても、「モラル・エコノミー」の形成存立が地域の限定と関わるとされている点に留意すべきでは？ 「地理的制約をものともしない属人的世界宗教」たるイスラームの経済における「モラル」の生まれ方との異同。

⇒チャリティという点でいうと、今日様々な宗教において、活発なチャリティ活動が行われていて、大規模な基金を擁し地域・宗教を超えた事業も少なくない。それらの活動でも、利己と利他が結びついている場合は多いだろう。イスラームが特別だとすれば、どのような点でそう言えるのか。

以上長くなったが、コメントの I についてまとめると以下の通りである。

- ① 「資本主義」という語をどのように用いているか
- ② 「資本主義」のうちどの部分・どの側面をのりこえようとしているのか。実体経済と遊離した金融資本主義の暴走を批判しているように読めるが、実体的産業資本主義についてはどうなのか。本書では生産（製造業、農業など）に直接関わる話は殆ど出てこない（第6章はアパレル産業を扱うが、主に流通の話）。イスラーム経済における製造業のあり方をどのようにとらえるか。
- ③ イスラームが「合理的経済人」(?) を原点とした市場経済的指向を持ちながら、資本主義の弊害を克服できる究極的な理由は、ムダーラバに見られるような人と人との具体的つながり（共同事業者的な性格）が、「資本主義」の暴走を抑止できる、という点にあると考えてよいか。

II コネクティビティ、フレキシビリティ、モビリティ、ユニバーサリティ

II-1 用語について

本書のキーワードであるこれらの言葉は、いずれも柔軟さや開放性を示す言葉である。それらはイスラーム経済の特徴であるとされるとともに、他の経済制度にも（強弱はあれ）共通して見られるものとされる。

3-4頁「他地域・他時代・他文化の経済制度との多様なつながりの中で、イスラーム文明を支えた経済制度が作られていく動態のことを、本書では**イスラーム経済のコネクティビティ**と呼ぶことにしたい。……こうしたコネクティビティは、古今東西のあらゆる経済制度で見られるというのはいうまでもない。私たちの世界の支配的な経済システムである近代資本主義も、前近代までのさまざまな歴史的経験の上に成立しており、世界各地の固有の政治経済社会文化状況に応じて多様に展開されている。したがって問うべきなのは、イスラーム経済のコネクティビティによって実現した経済制度が、どのような構造によって存立しているのかということであり、本書はそこにイスラーム経済のある種の特殊性があると考えるのである。結論を先取りするならば、前近代のイスラーム文明を支えた経済制度や現代のイスラーム経済の実践は、それらがコネクティビティの発揮にもとづく雑多なソースの組み合わせをルーツに持っていたとしても、必ずイスラームの理念という包括的な価値体系の中で正当化されるロジックを与えられた上で制度が実用化、展開されているというものである。本書では、こうした特性を**イスラーム経済のフレキシビリティ**と呼ぶことにしたい。」

11頁「本書では、そうしたイスラーム経済の持つ制度的なコネクティビティおよびフレキシビリティの特性をまとめて**モビリティ**と呼ぶことにしたい。一般にモビリティは、人やモノの動きやすさや流動性・移動性の高さを指す言葉として用いられるため、制度のモビリティという言い回しには違和感を覚えるかもしれない。しかし……イスラーム世界の経済制度は、あたかも主体性を持ったモノであるかのように他のさまざまな制度とつながり（コネクティビティ）、それを融通無碍に吸収・融合（フレキシビリティ）するようなダイナミズムを有している。そうしたダイナミズムを表現するのに最も理解しやすい隠喩として、モビリティという語をあえて使ってみることにしたい。」

18-19頁「ムダーラバから株式会社までのプロセスを一望するならば、それは「イスラーム化」なのではなく、逆に、信仰理念の価値体系の中で実用化が担保されていた制度が、信仰に関係なく誰もが使える制度として「普遍化」（もしくは脱宗教化）したものだということができるだろう。こうしたイスラーム経済の特性を本書では、**イスラーム経済のユニバーサリティ**と呼ぶことにしたい。……数ある普遍化志向を持つ文化、宗教、イデオロギーの中でもイスラームは突出したユニバーサリティを持っている…。」

① 一般に、比較史においてこれらの言葉を使う場合、その社会や制度自体の特色を示す場合が多いが、本書では一段メタなレベルで、社会や制度の変化・受容・伝播の仕方について用いられている。ただ、本書を通じてそうした使用法が一貫しているかというところでもない。例えば第9章で「イジャラ取引を通じた長期にわたる関係、すなわちコネクティビティ」（244頁）、「モラル・コミュニケーションに基づく市場のコネクティビティ」（246頁）という場合、他の経済制度とのつながりの話ではなく、イスラーム旅行積立という取引形態そのものの性質として、顧客や金融機関、旅行者などの間の二者間合意の積み重ねとして成り立っていることを述べているので

ある。本プロジェクトのリーダー黒木英充氏の「ネットワークはその全体性がテーマなのに対し、コネクティビティは個々の（多方向的な）つながりに注目する」（『イスラームからつなぐ1 イスラーム信頼学へのいざない』総論）といった書き方によると、本プロジェクト全体では、人と人との関係に関わるこちらの用法も用いられているのかもしれない。ちなみに「ネットワーク」についていうと、「イスラームの都市性」プロジェクトの際には「ネットワーク」という語がしばしば登場し、それはイスラーム社会の水平的で柔軟な人間結合の在り方を示す語としてかなり広範な影響を及ぼすとともに、それぞれの地域におけるその内実についての具体的議論が求められもした。本書では、「グローバル・ネットワーク」（273頁）、「（二者間合意に基づく）ネットワーク型のガバナンス」（245頁）といった用法を除くと、殆ど使われていないようである。

- ② これらの言葉のうち、コネクティビティについては、「古今東西のあらゆる経済制度に見られるもの」で、それぞれに異なるコネクティビティのあり方が問題になるとされている。一方で、フレキシビリティについては、イスラームの理念を柔軟に適用して様々な制度を正当化するロジックをつくり出すという意味で、イスラーム特有のものと考えられているように見えるが、文化的理念の柔軟な適用ということは他の文化圏にも見られるだろう。ここで特にイスラームの場合「フレキシビリティ」が強調されるのは、他地域の場合にはほぼそのまま採用できる制度でも、イスラームの場合はクルアーンをはじめとする動かしがたい規範があって、それに「フレキシブル」にあわせていく必要があるため、「フレキシビリティ」が特に必要になる、と読めるのだが、その理解でよいか。即ち、規範の硬さのゆえにそれとの調整に際し却ってフレキシビリティが必要とされる、というやや逆説的な関係である。
- ③ ユニバーサリティについては、他と比べてイスラームが「突出」しているとされている。ユニバーサリティという語の意味について、十分理解できているかどうかかわからないが、上記文章によれば、単にその地域の制度が他地域に広まるというだけでなく、それを支える文化的理念と切り離されて純粋に技術的なものをして伝わる、ということを行っているように読める。例えば中国でいうと、中国から周辺諸国に様々な制度が伝わっているわけだが、それを支える儒教などの理念とセットになっている場合、それはユニバーサリティとは言わない、ということになるのかと思う。ただ儒教の場合、固有の宗教というよりは普遍的な道徳であることを標榜しているので、中国側の主観としては、貨幣制度のような技術的なものであれ、家族制度のような社会的なものであれ、もともとユニバーサルなのである。むしろ、自意識としてユニバーサルな（即ち、強力な文化的対抗者が意識されない）方が、却って無自覚なエスノセントリズムに陥りやすいということはあるだろう。
- ④ 本書では、柔軟さ、開放性、普遍性を意味するこれらの語をキーワードにすることによって、固い本質主義的な類型比較論に陥ることを免れている。ただ一方で、「何が

イスラーム的なのか」ということがややわかりづらくなっているという印象を持った。「イスラームの都市性」プロジェクト（「比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究」1988－1990年度）は、西洋との対比でイスラーム地域の都市を固定的に性格づけるオリエンタリズム的「イスラーム都市」論を厳しく批判し、「イスラーム文明は、古代オリエント文明やギリシア・ローマ文明の果実を受け継ぎながら、『都市的に生きる』ことを人間の理想にかかげ、合理主義、個人主義、普遍主義の都市型宗教にともなう独特の社会空間を展開させてきた」（板垣雄三「序 都市性と比較」板垣雄三・後藤明編『事典 イスラームの都市性』亜紀書房、1992、7頁）と論じた。イスラーム社会が閉鎖的・固定的でなく、むしろヨーロッパ以上に自由・開放的で柔軟・包容的な性格をもつことを強調するこうした姿勢は、本書にも受け継がれていると思う。ただ、このような性格を強調することによって、「イスラームの特質」を明確に提示することが難しくなる可能性はあるかもしれない（いわば、文化的内容の外延の拡大にともない、内包が薄くなる）。

- ⑤ 伝統中国経済秩序の場合でいうと、自由（放任された自由）、開放、柔軟、包容といった点でイスラームと共通する点が多いように思う。しかし自由・開放的な中国社会では、それ故にリスクも大きいので、それを克服するために血縁などを通じたパーソナルな私的秩序形成が行われやすい。そのために、自由競争的な開放的環境の一方で、「信頼」の範囲が狭い人間関係に限定されるという一見閉鎖的な相貌を呈することにもなる。開放的であるとともに閉鎖的にも見えるという一見矛盾する事態。フォーマルな制度に対する「信頼」と、パーソナルな関係の集積としての「信頼」との異同。

II-2 比較について

- ① 「比較史の可能性研究会」では岸本は「所有」を担当し、イスラーム、東南アジア、中国を三つの軸とし、蛮勇をふるって、「所有の正当化のタイプの違い」といった大きな議論をさせていただいた（成功しているかどうかは別として）。本書では「比較史の可能性研究会が十分にカバーしなかった地域のうち、日本（沖縄）およびアフリカと古代インダス文明の研究者に参加を請い、それらとの『原理的比較』を行うことを試みる」（13頁）とある。しかし、本書において、日本、アフリカ、古代インダス文明についてのそれぞれ興味深い事例は示されているものの、「原理的比較」に関わる考察は十分読み取れなかった。
- ② 「比較史の可能性研究会」とのアプローチの違いに関して、本書では、以下のような方法が提示されている。

「(比較史の可能性研究会が、比較史的研究を様々なゲームのルールの解釈に譬えたのに対し)「本書のアプローチは、『ボールという球形の運動具が持つさまざまな可能性を観察する中で、その可能性のパターン(蹴る、投げる、運ぶ)を分類して、共通

性（運ぶ＝ラグビー、アメフト）や独自性（ラグビー＝ボールを持った選手のみブロック可、アメフト＝誰でもブロック可）を解明する』と表現できるだろう。その意味で本書の試みは、比較史の可能性研究会と比べて、限定的（スポーツ→ボール）でもあり、より根源的（いわゆる定式化されたスポーツにとどまらないボールの遊び、例えば、赤ちゃんや動物のボール遊び）でもあるといえる」（15頁）。

大変興味深い議論であるが、具体的にいうと、本書において「ボール」に当たるものは何なのだろうか。

著者の議論を正しく理解しているという自信は全くないのだが、例えば、以下のように考えられるだろうか。それぞれの経済制度はさまざまな構成要素（各種所有形態、企業形態、市場慣行等々）を含み、それら（いわばモジュール）が集まってシステムをなしている。それぞれのモジュールは他の経済システムにも類似・共通するものが多々あるが、組み合わせ方によって、個性ある経済システムが形成されている。例えば、ムダーラバのような仕組みは、経営の利益とリスクの配分法の一形態としてどこでも考案されておかしくないものであり、中国にも当然類似の形態は存在する。ただ、それが各種経営のなかでどの程度採用されているのか、他の要素とどのように組み合わせさせて経済を動かしているのか、という働きのあり方は、イスラームと中国とで異なる。上述の比喻でいえば、ボールに当たるのがムダーラバである（……？）違っていたらすみません。

以上、冗長かつ雑駁なコメントで恐縮ですが、よろしく願いいたします。

当日は、パワーポイントでより簡単にまとめる予定です。

なお、『比較史のアジア』以降、岸本の書いた文章で、本書及び本コメントに関連しそうなものを以下に挙げておきます。

- ・「中国中間団体論の系譜」岸本編『岩波講座「帝国」日本の学知3 東洋学の磁場』岩波書店、2006（岸本『史学史管見 明清史論集4』研文出版、2021、所収）
- ・「伝統中国の経済秩序をどのようにモデル化するか——20世紀中葉の日本の学界における一つの試み」中国社会科学院歴史研究所他編『第八回日中学者中国古代史論壇論文集 中国史学の方法論』汲古書院、2017（岸本前掲『史学史管見』所収）。
- ・“Property Rights and Factor Markets,” in Debin Ma et al. eds, *The Cambridge Economic History of China, Volume I, To 1800*, Cambridge University Press, 2022.
- ・“What is the ‘Self’?: The Expanding Ego and Charity Movements in Early Modern China,” in Miura Toru ed., *Comparative Study of Donation Strategies*, Toyo bunko, 2024.